

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

飼育～テントウムシ～／静岡市立登呂こども園（静岡県）

園や学級で、子どもたちが見つけた生き物を飼育することはありますか？

今回は、テントウムシの飼育を始めた子どもたちの事例を紹介します。

友達と一緒に、見つけたテントウムシを、よく観たり調べたりして、対象への興味をより深めていく子どもたち…。子どもたちの気づきや疑問などに共感し、園外にでかける機会を作ったり、子どもの必要感に応じて図鑑を出したりなど、環境を工夫する保育者の関わりが、子どもたちの飼育活動を支えています。



○ テントウムシとの出会い／5歳児

昨年度の冬、園庭の一角に畑を作り、種イモの植え付けを行い、ジャガイモを育てた。5歳児進級後の5月、水やりをしていた子どもたちが、テントウムシを見つけて飼い始めたことがきっかけとなり、子どもたちのアイデアで飼育コーナーを作ることになった。

✦ 場面1：テントウムシを見つける

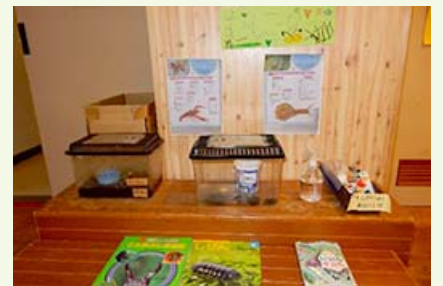
- 😊 Aちゃん：「テントウムシ、見つけた！」
- 😊 Bちゃん：「テントウムシって、何食べるの？」
- 😊 Cちゃん：「確か、甘い物を食べるって聞いたよ？」
- 😊 Dちゃん：「違うよ！花の蜜を吸うんだよ！」

● 子どもたちは、飼育コーナーを作ることは考えていたが、餌やりまでは考えが及ばず、実際に飼育すると、テントウムシの餌がなく、死んでしまうことがあった。

● 虫好きのCちゃんが、「テントウムシは、甘いのが好きだから砂糖をあげればいいよ」と、砂糖水を入れたアルミホイルを飼育ケースに入れてみるが、テントウムシは食べる様子は無かった。それを見たDちゃんが、「先生、テントウムシの図鑑ある？」と言ったことをきっかけに、図鑑を見えることになる。

😊 Cちゃん：「それ、いいね！探してこよう！」

● 子どもたちが、図鑑を見ると、テントウムシは、アブラムシを食べることが分かった。早速、子どもたちは、「登呂遺跡公園に、アブラムシがいるはず！」と、登呂遺跡公園に行きたい思いを保育者に伝える。



● 保育者の関わり

- 「子どもたちの様々な疑問や考えていることを聞き、受け止め、自分たちで話し合える場面が生まれるようにする。
- いつでも自分たちで調べられるように、図鑑の種類や置くスペースを工夫する。
- 保育者は、子どもたちの気持ちをよく聞き、思いが実現するように、アブラムシ探しに登呂遺跡公園に行けるように計画し、一緒に行くことにする。

❖ 場面2：テントウムシがごはんを食べてくれない

- 家庭で家族に聞いたり、図鑑で調べてきたりした子どもたちは、自分たちで近隣の公園に散歩に行き、アブラムシを捕まえて与えてみた。1日…2日…と様子を見るが、1つの飼育ケースのテントウムシはアブラムシを食べている様子が無かった。

😊 Dちゃん：「テントウムシ、アブラムシ食べないね」

😊 Bちゃん：「でも、図鑑には食べるって書いてある」

😊 Aちゃん：「部屋の中が、暑いからじゃないの？」

😊 Eちゃん：「でもさ、汗かいてないじゃん？」

😊 Dちゃん：「じゃあ、もう一回、調べよう」



● 保育者の関わり

- 餌を食べないテントウムシがいることを不思議がり、心配する子どもたちの思いに保育者も共感し、一緒に考える。

❖ 場面3：新しい発見！！～テントウムシにはいろいろな種類がいた～

😊 Dちゃん：「ねえ、これって、虫かごのテントウムシと同じだよ？」

😊 Aちゃん：「ニジュウヤホシテントウっていうんだね」

😊 Bちゃん：「ジャガイモの葉っぱ食べるって書いてあるじゃん」

😊 Eちゃん：「そっか！！だから、アブラムシは食べないんだね」

😊 Fちゃん：「これで、テントウムシもごはん食べられるね。良かった」



- 自分たちで調べていくと、テントウムシにも様々な種類があることに気づいた。種類によって背中模様が違ったり、食べる物にも違いがあることを発見したりした。友達と話し合い、考えがぶつかり合うこともあったが、自分たちで答えを見出そうとしていくうちに、「そうだったんだ！」と納得することを見つけると、自然に相手を認める姿になった。
- 飼育コーナーを作ったことは、子どもたちの人との関わりが広がるきっかけとなった。5歳児だけでなく4歳児に対しても自分たちの発見を伝えたり、年下の友達に図鑑を見せ、説明したりする子どもがいた。虫への興味をきっかけに、自分の思いを相手に伝えられる姿に成長した子どももいた。
- 春から飼育コーナーができたことで、子どもたちは様々な生き物に興味をもち、生き物をよく観たり、育てたりする姿が多く見られた。そして、梅雨の時期には、自分たちが田植えをした田んぼに、オタマジャクシやカエルを探しに出掛けたり、7月～8月にはセミ取りをしたりなど、多くの生き物との出会いや発見をすることにつながった。

● 保育者の関わり

- 保育者は、子どもたちが、テントウムシが餌を食べないことを心配する思い、餌が分かった時の喜びなどに共感する。
- 子どもたち一人一人の興味を受け止め、最後まで子どもたちの力や思いで協力して飼育を継続しようとする姿を、見守り続ける。
- 自発的な遊びや探究心を大切に、達成感が味わえる環境を工夫していく。

❖ 振り返って

- 子どもたちが興味をもつことで、「これはどうなっているんだろう」「もっとこんなことをしてみたい」という気持ちがたくさん生まれ、主体的な飼育活動に展開した。テントウムシや様々な生き物と関わる時に、友達と一緒に協力し考えを

出し合ったり、新しいことに目を向け挑戦したりする姿や、子どもの生き物と関わることにに対するワクワクした表情が多く見られた。

- 保育者が、初めから答えを伝えたり、成功体験に結び付けたりすることが、子どもにとって必ずしも良いとは限らないと再確認した。「やってみたけれど違った」「思うようにいかなかった」という経験があったからこそ、生き物をより観察し、愛着ももって、他の方法を試してみようと子どもたちは考えたと思われる。
- テントウムシや生き物の飼育を通して、保育者自身も生き物に対する正しい知識を学んでいかなければならないことを実感した。子どもの自然に対する興味・関心をさらに引き出し、探究へと広げたり深めたりしていく保育環境を今後も工夫していきたい。
- 子どもたちの興味・関心は、遊びの中から生まれている。生き物と出会い、よく観たり調べたり育てたりする「本物の体験」は、子どもたちの心に深く残り、季節や対象物が変わっても生きていると思われた。私たちは、その「知りたい・やってみたい」という「ワクワクした気持ち」が、「科学する心」だと考え、今後も、子どもの思いに寄り添いながら、保育者の関わりや環境を工夫していきたい。そして、「ワクワクした気持ち(=科学する心)」が育つことで、様々な活動に自ら取り組めるようになり、子どもの心を大きく育てることにつながっていくと私たちは考える。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」